

〔研究紹介〕

安倍晴明についての考察 —人物像の乖離を中心に—

人文科学研究科 人文科学専攻
修士1年 菊地 正太

1、研究の背景

平安中期に活躍した安倍晴明（921-1005年）は、享年85歳と推定される長寿の陰陽師であり、時代によって見方が大きく異なっている。藤原実資（957-1046年）による『小右記』、藤原道長（966-1027年）による『御堂関白記』等の古記録^{*1}によれば、宮廷陰陽師として為政者と親密な関係を構築している姿が伺える。彼の主な実績としては、『小右記』永延元年（987）2月19日条（当時66歳）に一条天皇の遷御に際して、邪気を祓う作用をもたらす「反閉」を行う、『御堂関白記』寛弘2年（1005）2月10日条（当時84歳）に、引越しの際の儀礼である「新宅作法」を行う、陰陽道の「六壬式」と呼ばれる占法を解説した『占事略決』を編纂したことなどが確認されている。以上の例を踏まえると、逝去する直前まで多くの依頼を引き受けた献身的な官人であったと言えるだろう。しかし、彼の死没から100年前後に成立した『大鏡』・『今昔物語集』にて、式神を自在に操り為政者の命を救う「卓越した能力を持つ陰陽師」として描かれるようになり、近世以降では「狐の子ども」や「鳥の声が聴ける」といった先天的に特異性を有する人物像へと変遷し、異人・妖人としての見方が強まることとなる。田中貴子氏^{*2}は一連の現象に対して、「普通、人が死後説話化されるにはある程度の時間を要するものである。ところが、晴明の場合は一〇〇年足らずで四話も『今昔物語集』に収載されるに至る。これはやや異常な状態といってよく、こういう一般的な人とは異なる扱いを受けた晴明には、やはり何らかの伝承が生存中から生まれていたことが想像されよう」と、平安後期から鎌倉初期に晴明説話が集中的に執筆された点に疑問を呈している。

近年は安倍晴明及び陰陽師にまつわる研究が増加傾向にあり、彼の歴史上での行動と、『大鏡』、『栄花物語』、『今昔物語集』などを筆頭とする創作上の姿とに齟齬が生じている点が多く指摘されている。しかし、彼が貴族達の中で実態よりやや過剰に評価されるに至った明確なルーツが不透明であるため、研究の余地があるのではないかと考えられる。

*1 東京大学史料編纂所データベースを「晴明」で検索

*2 田中貴子『安倍晴明の一千年「晴明現象」を読む』法蔵館文庫 2023年

2、研究の方向性

上記のような事情を踏まえ、現在執筆中の修士論文では、安倍晴明の「言動」に着目した上で考察を試みる。具体的には、晴明の名が文献上初めて登場する古記録である『小右記』(977～)から、晴明が狐の子であると説明された陰陽書『篋篋内伝』(16～17世紀成立)までの時代の範囲内で、「晴明」の名が上がる記録・説話集を研究対象として扱う。そして用例を抽出した上で、①：実像・または従来 of 宮廷陰陽師と同等の役割を果たしている例、②：宮廷陰陽師の所属であることに変化はないが、能力者としての誇張が見られる例、③：②の例と照らし合わせた際に誇張・改変の程度が特に激しい例(『篋篋内伝』、能『鉄輪』等の突飛な変化が見られる作品)のいずれかに分類し整理する。彼の発言、生い立ち、使用する呪術等の凡例を比較検討した上で、なぜ彼が突出して高い評価を獲得し、人物像が肥大化したかの具体的な過程について論述したいと考えている。

その他の参考文献

- ・倉本一宏『現代語訳 小右記 三代の蔵人頭』(1～16巻)吉川弘文館 2015-2023年
- ・倉本一宏 藤原道長『御堂関白記 全現代語訳』(上・中・下)講談社学術文庫 2009年
- ・繁田信一『平安貴族と陰陽師 安倍晴明の歴史民俗学』吉川弘文館 2005年
- ・中島和歌子『陰陽師の平安時代 貴族たちの不安解消と招福』吉川弘文館 2024年